

住民主体の日常的住環境形成モデルの研究

代表：西村 伸也（新潟大学工学部建設学科 教授）

〔研究報告要旨〕

本研究は、新潟大学と地域が協働する実践的なまちづくり事例である栃尾表町の雁木づくり活動と三条市の里山ポケットパークづくり活動を対象とした。これらの事例は、学生と住民が協働することで世代を越えた取り組みを可能とし、活力を生み出しながら住民の住環境を毎年少しずつ継続的につくっているという特徴を持つ。ここでは、これらのまちづくりを「日常的住環境形成」と呼び、活動の多様な展開を示すと共に、実践的なまちづくりを取り入れた教育プログラムの教育的効果や持続的活動の要因を考察した。

住民主体の住環境形成を持続させるしくみの要点として次の7点が検証できた。一つは、住民と学生の協働による地域活動の活性化や学生の学びである。二つ目に、計画策定や単年度のイベントやプロジェクトを超えて、まちの中に日常的に存在する建造物を毎年一つずつデザインして建設していく活動とすることである。三つ目に、競争的環境や多様な立場の者からのデザイン検討によって持続可能な質の高いものづくりをしていくことである。四つ目は、手づくりを前提に低予算で少しずつ進めていくことである。五つ目は、様々な実践的な活動の場、気軽に立ち寄れるまちの中の場、ネットワークカーとなる人の存在で参加者間のコミュニケーションを維持していくことである。六つ目は、地元の技術と材料を活用し、画一的ではない地域に根ざしたデザインを創出することである。そして最後に、地域の専門家の助力を求めることである。

まちづくりでは、毎年さまざまな問題が発生するが、その度に住民、専門家、行政と丁寧に議論を重ね、それらの課題を乗り越えながら活動を進めている。毎年活動の中で地域と大学が協働する活動の体制を少しずつ変化させながら活動を持続させ、住民が主体的に取り組める住環境形成活動として成長していく。